第二章　文を構成する成分と基本文型

漢文、すなわち古典中国語を構造的に理解するためには、何よりもまず文を構成する基本的な成分とその関係を知る必要がある。

1．文の成分

文は、**主語**と**述語**、**目的語**という主要成分によって構成される。それを補足修飾する付加的な成分として、**連体修飾語**、**連用修飾語**、**補語**がある。これら六つを**文の成分**と呼ぶ。

①主語

主に文の先頭に置かれる名詞または名詞句で、述語が表す動作や作用、状態などの主体を表す語を**主語**という。

※　中国語の語法学では、主に文頭に置かれた名詞や名詞句を主語とする考え方と、動作の主体を主語とする考え方に学者の意見が二分されてきたが、現在では前者が主流。ここでもそれに従う。

主語は述語との関係から、次の四つの種類に分類される。

ア、施事主語

述語の動作や行為を行う主体を表す主語を**施事主語**（せじ）という。

項王笑ふ。（史記・項羽本紀）

▼項王笑ふ（かうわうわら）。

▽項王が笑う。

述語「笑（フ）」という動作を行う主体がほかならぬ「項王」。つまり施事主語である。

イ、受事主語

述語の動作や行為を受ける客体を表す主語を**受事主語**（じゅじ）という。

主辱（メラル）む。（韓非子・存韓）

▼主辱（しゅじょく）められる。

▽主人が辱められる。

主人が誰かを辱めるのではなく、主人が誰かに辱められるの意。したがって「主」は受け手になるから受事主語だ。

胡可（シ）伐（ツ）。（韓非子・説難）

▼胡（こう）伐つべし。

▽胡の国が攻めてよい。

印刷・複写禁止

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

「どこの国を攻めればよいか。」という鄭の武公の問いに対して、家臣が答えたもの。胡がどこかの国を攻めるのではなく、鄭の攻める対象が胡そのものである。つまり、意味的には「胡を攻めてよい」ということ。このように攻められる対象なので、「胡」は受事主語になる。

ウ、存在主語

「有」を用いる存在文においては、構造上の目的語が意味上の主語にあたる。その意味上の主語がどこに存在するかという場所や範囲を表すのが、文の構造上の主語で、これを**存在主語**という。

また、「在」を用いる所在文で、そこに存在する主体を表す主語も存在主語と呼ぶ。存在文とは次のような文だ。

斉|有二孟嘗君一。

（史記・春申君列伝）

▼斉に孟嘗君有り。

▽斉国に孟嘗君がいた。

口語訳を見れば、あたかも「孟嘗君」が主語のように思えるが、それはあくまで意味上の主語であって、構造的には文頭の名詞「斉」が主語、すなわち存在主語になる。意味上の主語「孟嘗君」がどこにいるかというと、「斉」にいるわけだ。つまり存在主語は意味上の主語が存在する場所を表しているのである。

動詞「有」には「もつ」という所有の意味があるが、あえて言えば、「場所『斉』が孟嘗君をもつ」と考えれば、「斉」が主語であるということが飲み込みやすくなる。

このように「〜に—がある」という存在文では、意味上の主語が存在する範囲や場所を、存在主語が表す。

※　存在文と同じ構造をとる文として現象文がある。「雨雪」（雪が降る）、「雨霜」（霜がおりる）など、自然現象が発生することを表す文を**現象文**というが、人や事物の出現や消失を表す存在文と同じ性質をもつ。この形式の文については、無主語文の項で後述する。なお、存在文と現象文を併せて**存現文**と呼ぶ。

次の文は、**所在文**だ。

孔子|在一陳。

（孟子・尽心下）

▼孔子陳に在り。

▽孔子が陳にいる。

陳にいる主体が「孔子」であることを表しているので、「孔子」は存在主語。その孔子がどこに存在しているかを表すのが「在」を用いる所在文の働きだ。もしこれが「陳有二孔子一」であれば、陳に誰が存在するのかということを表す存在文になる。

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

◇「有」と「在」の違い

「有」と「在」は、ともに人や事物の存在を表す動詞だが、字義や用いられ方には違いがある。このことについては、本邦の荻生徂徠が明快に述べている。

有ト無ト對ス　在ハ没又去ト對ス　有ハ只アリ　在ハニアリト心得ルナリ　在ハマシマストヨミテ居ル意ニ使フモ同ジコトナリ　有字ノ下ハ物ナリ　在字ノ下、居處ナリ

市有人　人在市コレニテョクスムゾ　『訓訳示蒙』

▽「有」は「無」の反義である。「有」はただ「あり」、「在」は「去」の反義である。「在」は「ます」と読んで「居る」の意味で用いるのも同じことである。「有」にあり」と理解するのだ。「在」は「ます」と読んの字の下は物である。「在」の字の下は場所である。「市有人」、「人在市」、これで了解できる。

要するに**「有」は存在を表し「在」は場所を表す**ということだ。したがって「有」の下には存在する物が置かれ、「在」の下には存在する場所が示される。

市有人。　…「人」の存在を表す

▼市に人有り。
▽市場に人がいる。

人在市。　…人がいる「場所」を表す

▼人市に在り。
▽人が市場にいる。

エ、主題主語

述語が描写したり述べたり、判断したりする対象となる主題を表す主語を**主題主語**という。

兵少、食尽。　（史記・項羽本紀）

▼兵少なく、食尽く。
▽兵士は少なく、食料は尽きた。

「兵」がどうであるのかというと少ないのであり、「食」がどうであるのかというと尽きたのだ。つまり、兵や食について描写して述べているので、「兵」「食」はそれぞれ主題主語になる。

晏子、賢人也。　（説苑・奉使）

▼晏子は賢人なり。

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

▽晏子は賢人である。

「晏子」という人物がどうであるか、すなわち賢人だと判断している。だから、「晏子」が主題主語だ。

以上のように、主語は必ずしも行為主・動作主とは限らないので、注意が必要。また、主語は文の先頭に置かれる名詞または名詞句、あるいはそれに準じる語（「我」などの代詞、「一人」などの数量詞など）だ。したがって、主語を構成する語や語句は必ず名詞または名詞句になるのだということを理解しておくのは、文の成分を見極める重要なポイントになる。

②述語

主語に示されたことに対して、その動作・状態・性質を述べる語を**述語**という。漢文すなわち古典中国語では、原則として述語は主語の後に置かれる。中国の文法用語では謂語（いご）と呼ばれるが、同じ意味である。

主語　述語
顔淵死。（論語・先進）

▼顔淵（がんえんし）死す。

▽顔淵が死んだ。

この例は、主語「顔淵」＋述語「死（ス）」の順になっている。「死　顔淵」の語順には絶対にならない。「死　顔　淵」だと、語順から「顔淵を死（ころ）す」という意味になってしまう。したがって、漢文においては、この語順が鉄則であることをまず押さえてほしい。

このような「主語＋述語」の構造を**主述構造**という。

主語　述部
子貢問政。（論語・顔淵）

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

▼子貢政を問ふ。

▽子貢が政治を問うた（＝政治はどうあるべきかを質問した）。

この例は、まず施事主語として「子貢」が示され、その子貢がどうしたのかを「問政」の部分で述べている。前の例の「顔淵死」と構造的に異なるのは、述語が単独で用いられずに、目的語「政」を伴っている点だ。

このように述語だけでなく、それを修飾する語、後述する目的語や前置詞句、語気詞やその他の修飾語が含まれて複数の語句からなる、主語に対する叙述内容を**述部**と呼ぶ。なお、述部の中心になる述語のことを**中心語**という。

※　厳密には、文法を論じるからには、述部と述語の区別があってしかるべきだが、この章以降、本書では煩雑さを避けるため、特に区別が必要な場合を除いて、「不食」（否定副詞「不」が中心語「食」を修飾）など、副詞等が述語を前置修飾している述部をもあえて述語と呼ぶことがある。

主語　述部

始皇大笑。

▼始皇大いに笑ふ。

▽始皇帝は大いに笑った。

（史記・白起王翦列伝）

この例も、主語「始皇」の動作を叙述する部分「大笑」が、二つの語からなる述部である。副詞「大」が動詞「笑」を修飾しているが、述部の中心語は「笑」である。

漢字はその性質と働きから、名詞や動詞、形容詞などのさまざまな品詞に分類されるが、述語には主語との関係から、主に動詞、形容詞が用いられ、判断を示す場合には名詞が述語になることもある。また、主語と述語の構造そのものが主述述語として、述語に用いられることもある。

ア、名詞が述語となる場合（名詞述語）

「（何は）何である」という、述語が名詞または名詞句で、「主語＝述語」の関係を表す文。このような文を**判断文**という。

主語　述語

A（ハ）B。（ナリ）　（Bは名詞）

▼A（は）Bなり。

▽AはBである。

主語　述語（述部）

農、天下之本。（ナリ）

（史記・孝文本紀）

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

▼農は、天下の本なり。

▽農業は、国の基本である。

主題主語「農」に対して、叙述された「天下之本」（国の基本）という名詞句が述語になって判断を表す文を構成している。

主語　述語

仁、人心也。

述部

▼仁は、人の心なり。

▽仁は、人の心である。

（孟子・告子上）

主題主語「仁」が、名詞句「人心」だと述語で判断が述べられている。なお、文末の「也」を含めて述部とするが、「也」は判断の語気を表す語気詞。判断文の文末にはこの「也」が置かれることが多い。なくても意味は通じる。無理に訳し分ければ、「仁、人心」は「仁は、人の心」、「仁、人心也」なら「仁は、人の心だ」ぐらいの感じになるが、訓読では前者も「ナリ」をつけて読むわけで、自然な日本語訳という観点からは、同じに訳してよかろう。

イ、動詞が述語となる場合（動詞述語）

「何がどうする」という、述語が動作行為を表す文。

主語　述語

A　B。

（Bは動詞）

▼ABす。

▽AがBする。

主語　述語

漢王怒。

▼漢王怒る。

▽漢王は怒った。

（史記・留侯世家）

動詞「怒」が述語で、ここでは自動詞。動詞が述語になる場合、目的語を伴わずに単独で主述文を作るのは、この例のように主として自動詞の場合だ。たとえば日本語でも「私は笑う」なら、そうかい？と納得するところだが、「私は食べた」と人が言った場合は、「何を？」と、その対象を聞きたくなるものだ。それは通常、他動詞は「何を食べる」というふうに目的語を伴うことが自然だからだ。これは漢文でも同じこと。

主語　述部

王大怒。

▼王大いに怒る。

▽王はとても怒った。

（列子・湯問）

印刷・複写禁止

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

副詞「大（イニ）」が述語「怒（ル）」を連用修飾して「大怒（イニル）」が述部になる。

ウ、形容詞が述語となる場合（形容詞述語）

「何がどうである」という、述語が感情、事物の性質や状態などを表す文。

主語　述語
A　B。（ハ）（ナリ）　（Bは形容詞）

▼A（は）Bなり。
▽AはBである。

主語　述語
志念深。（シ）

（史記・管晏列伝）

▼志念深（しねんふか）し。
▽思慮が深い。

形容詞「深（シ）」が述語。主題主語「志念」の状態が「深い」と形容詞述語で表現されているのだ。

主語　述語　主語　述語
月明（ラカニシテ）秋水寒。（シ）

（李白「賦得白鷺鷥送宋少府入三峽」）

▼月明（つきあき）らかにして秋水寒（しうすいさむ）し。
▽月は明るく秋の川の水は冷たい。

主題主語「月」「秋水」に対して、述語「明（ラカナリ）」（明るい）「寒（シ）」（冷たい）は、それぞれ形容詞だ。

「明」は「あきらかなり」と日本語の形容動詞として読んでいるが、それは日本語の上での品詞であって、古典中国語では、人の感覚・感情、事物の性質や状態を表す語は、すべて形容詞に分類される。

エ、主述構造が述語となる場合（主述述語）

述部自体が「主語＋述語」の構造をとることがある。このような述部の構造を**主述述語**と呼ぶ。日本語の「象は鼻が長い」に似た表現になる。

主語　述部　主語　述部
A、B　C。（ハ）（ナリ）　・　A、B　C。（ス）　（BCは主述関係）
主語　述語　主語　述語

▼A、B（は）Cなり。・A、BCす。
▽Aは、BがCである。・Aは、BがCする。

印刷・複写禁止

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

主語　述部
王、年少。
（史記・南越列伝）

主語　述語
▼王（わう）、年少（としわか）し。
▽王は、年齢が若い。

この文は、主語（王）＋述部【主語（年）＋述語（少）】という構造である。つまり、述部が「年齢が若い」という「主語＋述語」の構造になっているわけだ。

主語　述部
紂、愈淫乱不レ止。
（史記・殷本紀）

主語　述部
▼紂（ちう）、愈淫乱止（いよいよいんらんや）まず。
▽紂王は、いよいよ淫乱な行いが止まらなかった。

少し複雑な形になるが、これも「淫乱不レ止（マ）」（淫乱がやまない）の部分が主述述語になる。つまり、主語（紂）＋述部【愈＋主語（淫乱）＋述部（不レ止（マ））】という構造だ。主述述語である上に、「愈」や「不」が用いられているために複雑に見えるが、文の根幹は「主語＋述語」の形に過ぎない。

③目的語（賓語）

述語の後に置かれて、述語の作用の客体を表す名詞や名詞句を**目的語**という。述語が表す動作行為の他動性の対象（～を）や、依拠する場所（～で）・起点（～より）・帰着点（～に）・対象（～に）など、また、作り出される結果（＝生産性の結果）（～と（する）・～と（いう）・～と（聞く））などを表す。

※　中国の文法用語では**賓語**（ひんご）という。「賓」は「客」の意で、述語の客体になる語だから「賓語」と呼ぶのだが、日本ではあまりなじみがないため、類似した用語として本書では目的語と呼ぶことにする。

たとえば、次のような文の場合、

愛（ス）レ人。

▼人（ひと）を愛（あい）す。
▽人を愛する。

述語「愛（ス）」という行為が直接及ぶ他動性の対象、すなわち客体は「人」であり、これが**他動性の目的語**になる。

また、次の文の場合、

印刷・複写禁止

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

月 入レ 山ニ。

▼月山に入る。

▽月が山に入る。

述語「入ル」の作用が何を拠り所にするかを「山」が示す。したがって「山」は**依拠性の目的語**である。

また、次の文の場合、

項 梁 号ス 武 信 君ト。

▼項梁武信君と号す。

▽項梁が（自分のことを）武信君と名付けた。

述語「号ス」は「名付ける」という作用を、「武信君」は「号した」結果の生産物を表すので、**生産性の目的語**である。

※ 日本の漢文教育では、訓読の際に「～を」と読む語と、「～に」「～より」「～と」などと読む語を区別し、用語もそれぞれ目的語と補語などと区別する場合がある。しかし、古典中国語では共に賓語であって、別の成分として区別されないものである。

述語＋目的語の構造のことを**述語構造**または述目構造という。

述語＋目的語　…　述語構造（述目構造）

目的語は特別な事情がある場合を除き、述語の後に置かれる。「主語＋述語」（主述構造）の語順が漢文構造の鉄則であるように、「述語＋目的語」（述語構造）の語順も構造の鉄則である。

ア、述語の対象などを表す目的語

述語に対して、その他動性の対象や、依拠性として動作行為が行われる場所・起点・到達点など、また、生産性として動作行為により作り出される結果などを表す。

述語	目的語		
B レ	A。ヲ	▼AをBす。	▽AをBする。
B レ	A。ニ	▼AにBす。	▽AにBする。
B レ	A。ヨリ	▼AよりBす。	▽AよりBする。
B レ	A。ト	▼AとBす。	▽AとBする。

他動性の目的語　依拠性の目的語　依拠性の目的語　生産性の目的語

印刷・複写禁止

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

主語　述語　目的語

王好レ戦。

▼王戦ひを好む。

▽王は戦争を好む。

述語「好」の後の目的語「戦」が「好」の他動性の対象を表している。

（孟子・梁恵王上）

主語　述語　目的語

患生ニ不徳。

▼患ひは不徳より生ず。

▽災いは徳が備わっていないことから生まれる。

目的語「不徳」は「徳が備わっていないこと」という名詞句。述語「生」に後置され、依拠性の目的語、すなわち生まれる起点を表している。

（後漢書・文苑列伝上）

述語　目的語　述語　目的語

転レ禍為レ福。

▼禍ひを転じて福と為す。

▽災いを転じて福にする。

一つめの目的語「禍」は述語「転」の他動詞の対象を表すが、二つめの目的語「福」は述語「為」という行為の生産性の結果を表している。

（史記・蘇秦列伝）

主語　述語　目的語　主語　述語　目的語

将軍戦ニ河北、臣戦ニ河南。

▼将軍は河北に戦ひ、臣は河南に戦ふ。

▽将軍は黄河の北で戦い、私は黄河の南で戦いました。

依拠性の目的語「河北」「河南」は、述語「戦」という行為が行われた場所を表す。このような目的語を**場所目的語**（処所賓語）という。

（史記・項羽本紀）

主語　述語　目的語

漢王至ル洛陽ニ。

▼漢王洛陽に至る。

▽漢王は洛陽に到着した。

依拠性の目的語「洛陽」は、述語「至」に対して帰着点を表している。

（十八史略・西漢）

目的語と述語の関係は常に同じであるとは限らない。これ以外にも原因や比較の対象を表すなど、述語に対する目的語の関係は多岐にわたり、語と語の関係や、文脈から判断する必要がある。

イ、存在文の目的語

「A有レB」（AにBがある）や「A無レB」（AにBがない）という、存在・不存在を表す形式を**存在文**という。

存在文では、構造上の目的語Bが文の意味上の主語にあたり、

印刷・複写禁止

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

構造上の主語A（存在主語）はその意味上の主語B（目的語）が存在する場所や範囲、あるいは意味上の主語Bが表す内容の発生・実現している対象を表す。

存在文の形式

主語　述語　目的語
A（ニ）有リ。B。・A（ニ）無シ。B。
場所範囲　意味上の主語　場所範囲　意味上の主語

▼A（に）B有り〔無し〕。
▽AにBがある・いる〔ない・いない〕。

主語　述語　目的語
山頂有リ大池。

▼山頂に大池有り。
▽山頂に大きな池がある。

（夢渓筆談・雑誌一）

「大きな池がある」という日本語訳からすれば、あたかも「大池」が主語のように見えるが、主語は「山頂」である。「有リ」は本来「もつ」という意味の動詞で、「山頂が大きな池をもつ」という構造から存在を表すようになったもの。したがって、「山頂」が存在主語で、「大池」が目的語になる。この目的語は本来「有リ」（もつ）の他動性の目的語だが、「大池」が意味上の主語となり、構造上の主語「山頂」が、その「大池」の存在する場所を示しているわけだ。

主語　述語　目的語
帝有リ慚色。

▼帝慚色有り。
▽帝には恥じ入る様子があった。

（晋書・何充列伝）

この文では、「慚色」（恥じ入る様子）が見られたのは「帝」であり、主語「帝」は場所というよりもそれが発生している対象と考えるべき。これも「帝が慚色をもつ」が元々の構造だと考えれば、わかりやすい。

「有リ」の原義は「肉を手に持ち押し出す」の意で、「もつ」の意を生じたので、本来の「もつ」という意味でも用いられ、同様に「A（ニ）有リB」の形をとることがある。その場合は①の「述語の対象などを表す目的語」に分類されるものと考えてよい。

主語　述語　目的語
我有リ旨酒。

▼我旨酒有り。
▽私にはうまい酒がある。（＝私はうまい酒をもっている。）

（詩経・小雅「鹿鳴」）

所有を表す「有リ」の例。普通はこのように読まれるが、「有リ」が所有

印刷・複写禁止

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

を表す時は、「我 有二旨 酒一」または「我 有二 旨 酒一」と、「もツ・たもツ」と読むこともある。

「有」の対義語である「無」も、「存在しない・もたない」という意味の動詞だ。「有」と同様の構造をとって、非存在・非所有を表す。「A 無レ B」（AにBがない）の形をとって非存在を表す場合、これも存在文といい、非存在文とはいわない。

主語　述語　目的語
国 無二盗 賊。

▼国に盗賊無し。

▽国に盗賊がいない。

（韓非子・外儲説左上）

「無」は「有」の対。右の例は「国 有二盗 賊一」（国に盗賊がいる）の反対の意味を表し、目的語「盗 賊」の存在を否定している。存在主語「国」は、いわば目的語「盗 賊」が存在しないエリアを表しているのだ。

ちなみに、「無」は「なシ」と日本語の形容詞で訓読するが、古典中国語の品詞は動詞である。

◇存在文に準じる表現

「A 有レ B」や「A 無レ B」に準じる表現として、次のようなものがある。

A 多二 B。（AにBが多い。）
A 少二 B。（AにBが少ない。）
A 寡二 B。（AにBが少ない。）

「多」「少」「寡」は本来の品詞は形容詞だが、この形式では目的語Bをとって述語構造になることにより、「多くもつ ↓ 多く存在する」、「少なくもつ ↓ 少なく存在する」という意味の動詞のように働いて述語となっているのだ。

主語　述語　目的語
地 多二 積 雪。

▼地に積雪多し。

▽地に積雪が多い。

（隋書・北狄列伝）

「多」「少（寡）」も目的語が意味上の主語にあたり、構造上の主語はその目的語が多い（少ない）場所や範囲・対象を表す。ここでは、目的語「積 雪」が多い範囲が主語「地」になる。

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

ウ、判断文の目的語

対象に対して表現者の主観的な判断を示す表現を**判断文**という。日本語で「AはBである」とか「AはBに似る」などの表現がこれにあたる。この表現に述語として「である・だ」という意味の動詞や「似る・～のようだ」という意味を表す動詞が用いられることがあり、その場合はその後に判断された内容を表す名詞または名詞句が目的語として置かれる。

a、「AはBである」という表現

「AはBである」という意味を表すには、漢文では「A（ハ）B（ナリ）」と表現するだけでも十分可能だ。しかし、文の主語と述語を結ぶ働きをする語（**繋辞**）として判断を表す動詞「為（リ）」や「是（レ）」を用いる表現形式もある。これらは日本語訳すれば「だ・である」にあたるので動詞というのが飲み込みにくいが、この「為（リ）」「是（レ）」は、いわば英語の be 動詞に相当すると考えるとわかりやすい。これらが述語となり、何であるかという内容を表す名詞を目的語として後にとる。

「為（たり）」は、動詞の本義「～となる・担う」という意味からの派生義で、「～である」という繋辞としての意味をもつようになったと考えられる。

A（ハ）為（リ）B。

▼A（は）Bたり。

▽AはBである。

（書き下し文の傍点部は漢字を平仮名書きすることを示す。以下同じ。）

主語　述語　目的語　主語　述語　目的語

爾、為リ爾、我、為リ我。

（孟子・公孫丑上）

▼爾（なんぢ）は爾（なんぢ）たり、我（われ）は我（われ）たり。

▽あなたはあなたであり、私は私である。

述語「為（リ）」は「だ・である」という判断を表す動詞。ここでは「爾」（あなた）「我」（わたし）がそれぞれ「為（リ）」の目的語になる。「あなたはあなたと為（な）る・あなたはあなたを担う」から「あなたはあなたである」という意味を表すようになったと考えれば、「爾」が「為（リ）」の目的語であるということが飲み込みやすくなるだろう。

「君（ハ）君（タリ）、臣（ハ）臣（タリ）」（君は君であり、臣は臣である「論語・顔淵」）などの例もあるのだから、右の例も「爾（ハ）爾（ナリ）、我（ハ）我（ナリ）」と表現できるはずだが、これらの後の方の「君」や「爾」は、名詞でありながら実質的な意味として「君主・あなた」をもつと共に、「～である」という形式的な動詞的働きを有しているはずである。その形式的な働きを「為」で

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

表現したのが、右の例になろうか。

訓読では目的語から必ず返って読むので返読文字として扱う。また、「為」は古典中国語としては動詞だが、「～である」という意味で用いられる場合、日本語の助動詞「たり」と読みならわしている。したがって、書き下す際には平仮名に改めなければならない。また、この意味の「為」を日本語の断定の助動詞「なり」と読み誤る間違いが目立つが、そのように読むことは決してない。助動詞「たり」は体言にしか接続しないので、「為」に返る語には送り仮名がないことが判断材料になる。

この「為」に限ったことではないが、古典中国語としての品詞と、訓読した時の日本語の品詞は異なることがある。これは異なる言語間では当然のことであって、「たり」と訓読しているから「である」という意味なのではなく、「為」が「～である」という意味にあたる動詞だから「たり」と翻訳（＝訓読）したのだという考え方の方向性が大切だ。

「是」も繋辞として「～である」という意味を表す。「是」はもともと代詞で、「○○○○、是一」（○○○○は、それは一である）のように、複雑な主語「○○○○」を、代詞「是」で受けて指示する形で用いられたものが、後に複雑でない主語に対しても用いられ、繋辞としての働きをもつようになったと考えられる。このような繋辞としての用法は古くにも若干見られるものの、頻繁に用いられるようになるのは魏晋の時代以降で、現代中国語でも受け継がれている。

A（ハ）是（レ）B（ナリ）。

▼A（は）是れBなり。

▽AはBである。

主語　述語　目的語

我（ハ）是（レ）五児之父（ナリ）。

▼我は是れ五児の父なり。

▽私は五人の子の父である。

（北史・隋宗室諸王列伝）

「是」も英語の be 動詞と似た働きで「～である」という意味を表す動詞。ここでは「五児之父」が動詞述語「是」の判断した内容を表す目的語だ。したがって、「是」が常に判断文の動詞として用いられるとは限らず、「これ・この」「彼」などという意味の代詞として用いられたり、構造助詞として用いられることもあるので注意が必要。

なお、判断文の動詞としての「是」は、訓読の習慣として「これ」と読むが、具体的な指示内容をもつ指示代詞とは異なるので、「これ」とは訳さない。

b、「AはBに類似する（同じである）」という表現

主語Aと目的語Bが類似している、または同等であることを表す時には、動詞**「如」**や**「若」**、**「猶」**、**「由」**などを用いて

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

表現する。

これらは訓読では「ごとシ」または「なホ～ノごとシ」と読んで、日本語では助動詞になり、じゃっかん飲み込みにくいところがあるが、古典中国語ではいずれも「似る」の意味に近い動詞である。

A（ハ）如（シ）B（ノ）。・A（ハ）若（シ）B（ノ）。

▼A（は）Bのごとし。

▽AはBのようである。・AはBと同じである。

A（ハ）猶（ホ）B（ノ）。・A（ハ）由（ホ）B（ノ）。

▼A（は）猶（なほ）〔由（なほ）〕Bのごとし。

▽AはBのようである。・AはBと同じである。

主語　述語　目的語

白髪如（シ）霜草（ノ）。

（李白「覧鏡書懐」）

▼白髪霜草のごとし。

▽白髪が霜のおりた草のようである。

「如（ごとシ）」は「従順である」が本義の字で、「言いつけ通りにする」から「似る」という類似・同等の意味を表すようになった動詞。後に何に似るかを表す目的語として名詞や名詞句を伴い、主語と目的語が類似することを表し、「～と同じである」「～のようである」などと訳す。ここでは、白髪が霜のおりた草とそっくりであることを表す。

訓読では、日本語の助動詞「ごとし」として読み、常に目的語から返って読むので、返読文字として扱う。また、助動詞として読むので書き下す際は平仮名にするのが普通。

日本語の「ごとし」は、体言や活用語の連体形に接続するが、その場合、助詞「が」「の」を伴うことが多く、その使い分けには微妙なところがあるが、漢文訓読では一般に「体言＋のごとし」、「活用語の連体形＋がごとし」と読んでいる。また、「如（シ）是（クノ）」（このようである）のように、指示の副詞「かく」に接続する場合は「かく＋のごとし」と読む。代名詞「我」「汝（なんぢ）」などの場合は、「われのごとし」「なんぢのごとし」以外に、「わがごとし」「なんぢがごとし」と読まれることもあり、読みはやや一定しないところがある。

主語　述語　目的語

浮生若（シ）夢（ノ）。

（李白「春夜宴桃李園序」）

▼浮生（ふせい）は夢（ゆめ）のごとし。

▽はかない人生は夢のようである。

「若（ごとシ）」も「如（シ）」と同じく「従順である」が本義の字。そこから類似・同等の意味で用いられる動詞。ここではかない状態が「夢」と同様であることを表している。訓読についても「如（シ）」と同じ。

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

主語　述語　目的語

過猶不及。

▼過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。

▽行き過ぎているのは及ばないのと同じである。

（論語・先進）

弟子の子貢に、若手の弟子の子夏と子張のどちらが優れているか問われた孔子が、子張は「行き過ぎている」、子夏は「及ばない」と答える。ということは子張の方が優れているのかとのさらなる子貢の問いに孔子が答えた言葉。

「猶」も類似・同等の意味で用いられる動詞。「猶」は「猿に似た動物」で、猿に似るから類似を表すともいうが、なにゆえこの意味を表すかについては諸説あり、はっきりしない。ここでは程よさを欠く点において同様であることを表している。

訓読では、「なホ〜ノごとシ」または「なホ〜（スル）ガごとシ」と読み、再読文字として扱う。だが、別に特殊な漢字というわけではなく、日本での読みの習慣に過ぎない。もちろん中国語で二度読みはしない。なお、「由」（なホ〜ノごとシ）も「猶」と音が通じ（あるいは、「猶」が「由」に通じ）、同じ意味の動詞で、再読文字として扱う。

④修飾語（連体修飾語・連用修飾語）

語や語句に対して、その表す意味を限定したり説明するために付加される語や語句を**修飾語**という。修飾語は三つの成分に大別される。

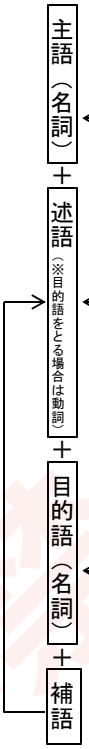
名詞や名詞句を修飾するものを**連体修飾語**、形容詞や動詞を修飾するものを**連用修飾語**と呼ぶ。この二つの修飾語は修飾される語（被修飾語）の前に置かれる。中国では連体修飾語を定語（後の体言を限定修飾する語）、連用修飾語を状語（後の用言の状況を示す語）と呼んで、それぞれを文の成分とし、次項の補語と区別している。

また、次項で詳述するが、被修飾語に前置する連体修飾語や連用修飾語とは別に、述語や述語構造（述語＋目的語）の後に置かれて後から前の述語を修飾する語や語句がある。これを**補語**と呼ぶ。すなわち後置修飾語である。

※　連用修飾語という用語は、文字通り「用言に連なって修飾する語」という意味である。しかし、それでは後述する補語も、述語や述語構造の後に置かれて述語を修飾する働きであるため、連用修飾語の定義の中に含まれてしまう。とはいえ、わざわざ前置連用修飾語とするのも煩わしい。本書で用いている連用修飾語とは、副詞など「述語に前置される連用修飾語」の意味であると了解してほしい。

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

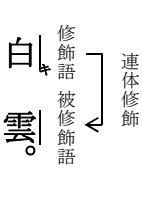
これらの修飾関係を図にしてみると、次のようになる。



※　述語には動詞、形容詞、名詞が用いられるが、目的語をとる時は動詞になる。

実際の漢文は、たとえば他に名詞述語を連体修飾する構造があるなど、右の図ですべてを言い尽くせるわけではないが、おおまかな位置づけを表したものと理解してほしい。

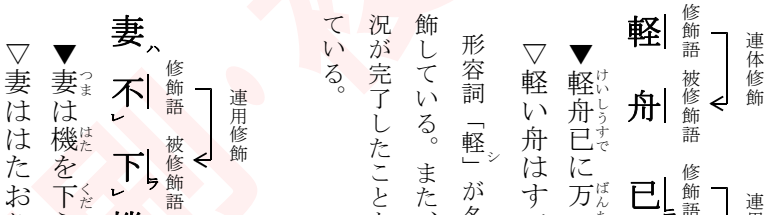
ここでは連体修飾語（定語）と連用修飾語（状語）について、簡単に説明しよう。



▼白き雲。

▽白い雲。

形容詞「白」が名詞「雲」を連体修飾する関係なので、この語順になる。「雲」は「雲」でも「白い雲」だと限定して修飾しているわけだ。

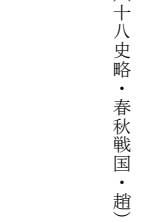


（李白「早発白帝城」）

▼軽舟已に万重の山を過ぐ。

▽軽い舟はすでに幾重もの山を過ぎてしまった。

形容詞「軽」が名詞「舟」を、数量詞「万重」が名詞「山」を連体修飾している。また、副詞「已」は述語「過」を連用修飾して「過」の状況が完了したことを示している。いずれも修飾語は被修飾語に前置されている。



（十八史略・春秋戦国・趙）

▼妻は機を下らず。

▽妻ははたおり機を下りない。

否定を表す副詞「不」が述語動詞「下」を連用修飾している。「不」は訓読で「ず」と打消の助動詞として読むために、修飾語であるとは理

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

解しにくいが、古典中国語では、「不」は動詞や形容詞などを連用修飾して「～しない・～でない」という否定的状況を示す副詞である。

連用修飾（修飾語 → 被修飾語）

以子之矛陷子之楯。

▼子の矛を以て子の楯を陥す。

▽あなたの矛であなたの盾を突き通す。

（韓非子・難一）

修飾語は単語のみとは限らない。この例では、「以子之矛」という前置詞句が前に置かれて「陥」を連用修飾している。前置詞句については後述するが、述語の前に置かれた時は、副詞と同じ位置、同じ働きで連用修飾語として述語を修飾する。

以上の例のように、漢文では**連体修飾語や連用修飾語は常に被修飾語の前に置かれる**ということをまず確認してほしい。

⑤補語

補語とは、修飾語のうち、主に動詞・形容詞性の述語や述語構造（述語＋目的語）の後に置かれて、述語に対して状況を補い補足修飾する語または語句で、いわば**後置修飾成分**である。よく「漢文は、日本語と同じように、修飾語は常に被修飾語の前に置かれる」と学校の授業等では説かれ、そのこと自体は誤ってはいないが、連体修飾語や連用修飾語は確かに述語に前置するものの、実はそれとは別に、述語や述語構造の後に置かれる修飾成分もあるのだ。

たとえば「不食三日」という文の場合、もともとの成り立ち自体は「食べないことが三日である」という主述構造であったろうが、それはつまり「三日間食べない」と意味的に等価であって、このように述語の後に置かれる「三日」は、「食べない」に対してその状況を補足する働きをする。したがって、このような成分を補語として、述語に後置される修飾成分とみなすわけだ。

（趙王）斎戒五日。

（述語 → 補語：後置修飾）

▼（趙王）斎戒すること五日なり。

（史記・廉頗藺相如列伝）

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

▽（趙王は）五日間身を清めた。

訓読からは「身を清めることが五日であった」という主述文のように見えるし、日本語訳として不自然でなければ、別にそのように訳してもよい。しかし、漢文の構造としては、「五日」は述語「斎戒」（身を清める）に対して、その状況を補足修飾する補語である。つまり「五日間身を清める」という意味であり、「五日」は述語「斎戒」を後置修飾しているのだ。ただ、最初に述べたように、「～すること…だ」という表現は、漢文訓読体から日本語の中に取り入れられ、普通に見られる表現なので、あえてひっくり返して訳さなければならないわけでもない。

（竇建徳）遺二秦王一以レ書。（新唐書・竇建徳列伝）

述語に意味を補充する

述語　前置詞句

▼（竇建徳）秦王に遺るに書を以てす。

▽（竇建徳が）秦王に文書を送った。

「以」は、ここでは訓読の習慣で「以てす」と日本語の動詞として読んでいるが、語法的には「～を」という対象の意味を表す前置詞である。前置詞はもと動詞であるが、すでに具体的な意味を欠き、形式的な意味のみを表す特別な動詞ともいえる。「（竇建徳）遺二秦王一」（竇建徳が送る）でも文としては成立するが、「以レ書ヲ」を述語「遺ル」の後に置くことで、「文書を」という意味を述語に対して補うことになる。これを後置修飾と考えれば、補語ともいえることになるわけだ。前置詞句については、後章で詳述する。

補語はその働きから、程度補語・数量補語・状態補語・方向補語・結果補語・可能補語に分類して説明される。

ア、程度を示す補語（程度補語）

述語の程度がどれぐらいであるかを補足する。程度補語には、述語が目的語をとる時、述語構造の後に置かれる場合と、述語の直後に置かれて、あたかも熟語のような形をとる場合とがある。

A（ノ）B スルコト 甚ダシ。

▼A（の）Bすること甚だし。

▽Aが大変〔とても〕Bする。

君美甚。（戦国策・斉一）

述語　補語

▼君美なること甚だし。

▽あなたは大変美しい。

「甚」は、形容詞述語「美」の程度を補足する程度補語だ。これは副詞「甚」が補語として述語に後置されたもので、意味的には「君甚

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

美（ナリ）」と同じになる。訓読からは、主語「君 美（ナルコト（ハ））」＋述語「甚（ダシ）」の文に見え、そのまま「あなたが美しいことは甚だしい」と訳されることもあるが、「甚（ダシ）」は述語を修飾する補語なので、日本語訳が不自然に感じられる場合には、「あなたは大変美しい」と訳せばよい。

述語　補語
笑ニ殺ス 邯鄲ノ人ヲ。

▼邯鄲（かんたん）の人（ひと）を笑殺（せうさつ）す。

▽邯鄲の人を大いに笑わせる。

（李白「古風五十九首・其三十五」）

「殺」は、述語「笑（フ）」を補足し、「笑う」程度が極端に甚だしいことを表す程度補語。「笑い殺す」の意味ではない。副詞として述語に前置される場合は「殺（はなはダ）」と読む。補語として用いられる時は多く動詞や形容詞の直後に置かれ、目的語を伴う文で目的語の後に置かれることは普通はない。

程度補語の「殺」は、他に「愁殺」「狂殺」「恨殺」「笑殺」等の形でも用いられ、日本語にも「悩殺」（大変悩ます）「忙殺」（非常に忙しい）などがあり、この程度補語の働きで用いられている。「殺」の異体字の「煞」も、同じ働きで用いられる。「殺」の字は、「ほこで人を殺し屍（しかばね）にする」が原義だが、その荒々しさ、ものすごさから生まれた働きであろうか。

イ、数量・期間・回数などを示す補語（数量補語）

述語の数量や、述語が述べることがどれぐらいの期間や回数行われるかを補足する。

A（ノ）B（スルコト）ナリ C。

▼A（の）BすることCなり。

▽AがCほど〔の期間・回〕Bする。

→自然な文意になるように柔軟に訳せばよい。

述語　補語
余 不レ食ラハ 三日ナリ 矣。

▼余（よ）食らはざること三日（さんにち）なり。

▽私は三日食べていない。

（国語・呉語）

「三日」は、述語「不レ食ラハ」の期間がどれぐらいであるかを補足する数量補語。「三日」は「不レ食ラハ」を修飾しているので、読みのままに「食べないことが三日である」などと不自然に訳すよりは、「三日食べていない」と訳す方が日本語としても自然であろう。

述語構造　補語
周公 行フレ政ヲ 七年ナリ。

▼周公（しうこうまつりごと）政（まつりごと）を行（おこな）ふこと七年（しちねん）なり。

（史記・周本紀）

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

▽周公は七年間政治を行った。

述語構造「行レ政ヲ」の後に数量補語「七年」が置かれ、政治を行った期間を補足している。補語はこのように述語構造に後置されることもあるのだ。この文もやはり「政治を行うことが七年間であった」と訳すのが不自然なら、「七年間政治を行った」と訳せばよい。

一日行レ千里。（述語・補語）

（史記・項羽本紀）

▼一日行くこと千里なり。

▽一日に千里行く。

「千里」は、述語「行ク」の距離がどれぐらいであるかを示す数量補語。この例も前の二例と同様、「千里行く」と自然な訳にすればよいし、「一日に行くこと千里であった」と古風な文体で訳すのも、それはまたそれでよし。

ちなみに一日に千里行く馬を「千里馬」といい、名馬の代名詞である。

漢軍囲レ之ヲ数重。（述語構造・補語）

（史記・項羽本紀）

▼漢軍之を囲むこと数重なり。

▽漢軍はこれを何重にも取り囲んだ。

数量補語「数重ナリ」が述語構造「囲レ之ヲ」の後に置かれ、述語「囲ム」ことがどれぐらいであるかを補足している。「これを取り囲むことが何重であった」より、「これを何重にも取り囲んだ」とする方が日本語訳としても自然であろう。

ウ、状態・状況・様子を示す補語（状態補語）

補語として述語の後に置かれ、述語の状態や状況がどのようであるかを補足する。中国では様態補語とも呼ぶ。

A（ノ）B スルコト C。（ナリ）

▼A（の）BすることC（なり）。

▽AがCのようにBする。

→自然な文意になるように柔軟に訳せばよい。

公子遇レ臣厚。（述語構造・補語）

（史記・魏公子列伝）

▼公子臣を遇すること厚し。

▽あなた様は私を手厚く扱ってくださった。

「厚」は、述語「遇ス（扱う）」ことがどのようであったかを補足する状態補語。主述文のように読んでいるが、これも「臣を遇することが手厚かった」と訳さなければならないわけではない。「厚シ」が「遇ス」を補

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

語として後置修飾しているのだから、「手厚く扱ってくださった」でよい。

A（ノ）B（スルコト）如（シ）C（ノ）。

▼A（の）BすることCのごとし。

▽AがCのようにBする。

人疾（ムコト）之如（シ）讎敵（ノ）。

（述語構造　補語）

▼人之（ひとこれ）を疾（にく）むこと讎敵（しうてき）のごとし。

▽人はこれを仇かたきのように憎む。

（顔氏家訓・勉学）

「如（シ）～（ノ）」という句が述語の状態補語となることがある。漢文では頻繁に用いられる形だ。「A（ハ）如（シ）B（ノ）」（AはBと同じである・AはBのようである）という判断文とは異なり、補語「如（シ）～（ノ）」は、述語の状態を示している。ここでは「如（シ）讎敵（ノ）」が「疾（ム）」の状態を表しているのだ。「仇かたきのようである」ことを示す。そのまま「これを憎むことが仇かたきのようであった」と訳しても構わないが、「仇かたきのように憎む」と訳して問題ない。

エ、方向を示す補語（方向補語）

述語の動作が行われる方向を補足する。述語の直後に置かれて熟語のように用いられたり、述語構造（述語＋目的語）の後に置かれることもある。中国では趨向（すうこう）補語と呼ぶ。

苫草屋梁皆飛起（ス）。

（述語　補語）

▼苫草屋梁（せんさうをくりやうみな）皆飛起（ひき）す。

▽屋根をふく草も屋根もみな吹き飛んだ。

（閲微草堂筆記・巻四）

方向補語は動作行為の行われる方向を表す。「飛起（ス）」は一つの動詞のように読むが、「起」は下から上へ向けて動作が行われることを表す方向補語。火薬の爆発によって屋根が上へ吹き飛んだ方向を表したもの。

吾欲（スレドモ）衙（ヘ）汝（ヲ）去（ラント）、口噤（ミテ）不（ル）能（ハ）開（クコト）。

（述語構造　補語）

▼吾（われなんぢ）汝を衙（くは）へ去（さ）らんと欲（ほつ）すれども、口噤（くちつぐ）みて開（ひら）くこと能（あた）はず。

▽私はあなたをくわえて行きたいと思うけれども、口が閉じて開くことができない。

（玉台新詠・巻一・「双白鵠」）

方向補語「去（ル）」は、「～して行く」などの動作行為の方向を表す。この例では述語構造「衙（フ）汝（ヲ）」（あなたをくわえる）の後に置かれている

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

が、「銜去汝」のように、述語の直後に置かれる場合もある。

述語　補語
馳下　峻山。

▼峻山を馳せ下る。

（史記・袁盎晁錯列伝）

▽峻山を馬で駆け下りる。

「馳下」も一つの動詞のように見えるが、「下」は下へ向かっての動きを表す方向補語だ。

方向補語が述語の直後に用いられる時、たとえば「馳下」（駆け下りる）や「飛去」（飛んでいく）などは一つの複合動詞あるいは熟語のように見えるが、なりたち自体はこのような補語の用いられたものなのだということを理解しておきたい。

オ、結果を示す補語（結果補語）

結果補語は、述語や述語構造の後に置かれ、動作の結果どうなるかを補足する。述語の直後に置かれ熟語に見えることもある。

述語　補語
人民　餓死。

▼人民餓えて死す。

（幽明録）

▽人民は飢えて死んだ。

「餓死」は実際一つの熟語として用いられる動詞だが、「餓」えた結果「死ぬ」の意。「死餓」とはいわないことからもわかる。このように述語の結果、何が起こるかを示すのが結果補語だ。

述語　補語
釣得　一巨魚。

▼一巨魚を釣り得たり。

（太平広記・水族四）

▽一匹の巨大な魚を釣った。

「得」が結果補語。「釣」という行為の結果、巨魚を「得」たということを表すわけだ。「得」は次の可能補語としても用いられるが、この例文は「釣ることができた」という意味ではない。

なお、この文は「釣得一巨魚」と読むこともできるが、そう訓読したからといって、「得」の結果補語としての働きが変わるわけではない。漢文の構造と訓読は分けて考えなければならない。

述語構造　補語
春風復多情、吹我羅裳開。

▼春風復た情多く、我が羅裳を吹きて開く。

（楽府詩集・清商曲辞一・「子夜四時歌七十五首」）

▽春風はさらに情愛が深く、私の薄ぎぬの裳裾を吹き開く。

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

「開」が結果補語。春風が裳裾を「吹」という行為の結果、裳裾が開くのだ。このように結果補語が述語構造（述語＋目的語）の後に置かれることもある。

カ、可能を示す補語（可能補語）

可能補語は、述語の動作行為が可能であることを補足する。「得」が代表的だが、反語表現または仮定や譲歩表現で用いられることが多い。

A（何〔誰〕）B得。
▼A（何ぞ〔誰か〕）Bし得ん。
▽Aは（どうして〔誰が〕）Bできようか。
→「何」「誰」などの反語副詞や疑問代詞が伴うことが多い。

蒼天ノ変化、誰カ料リ得ン。　述語　補語
（杜甫「杜鵑行」）
▼蒼天の変化は誰か料り得ん。
▽青空の変化（＝天の理）は誰が予測し得ようか。（いや、誰も予測し得ない。）

「得」は可能補語として述語「料」の後に置かれ、可能の意味を添える。この例の場合は、疑問代詞「誰」と併用されて反語で用いられている。不可能を表す場合は、「不得」の形をとって補語となり、右の例なら「料不レ得」（予測し得ない）となる。

如A得バ、～・若A得バ、～
▼如し〔若し〕Aし得ば、～
▽もしAすることができれば、～
→通常「如」「若」などの仮定の接続詞や、「縦使」などの譲歩の接続詞が伴う。

如シ人在リテ百丈ノ井中ニ、不レ仮ラ寸縄ヲ出ダシ得バ、述語　補語
此ノ人ニ、即チ答ヘン汝ニ西来ノ意ヲ。
（祖堂集・十六）
▼如し人百丈の井中に在りて、寸縄を仮らずして此の人を出だし得ば、即ち汝に西来の意を答へん。
▽もし人が百丈の深さの井戸の中にいて、（あなたが）短い縄も借りずにこの人を救い出せたら、すぐにあなたに（私が）西から来た意図を答えよう。

これは仮定表現で用いられる例。「得」は可能補語として述語「出」の後に置かれ、可能の意味を添えている。

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

以上、補語の働きについて代表的なものを紹介した。補語は時代と共に用いられる状況や定着度が変わってきた面があり、古漢文の補語をどのように考えるかについては、学説にも異論がある。

漢文では、補語の中でも特に程度補語、数量補語、状態補語はが多用される。多くが、訓読では「～すること ―（なり）」のように、「主語＋述語」の関係であるかのように読まれている。補語は述語を後置修飾するが、必ず述語を修飾するように日本語訳しなければならないと決まっているわけではない。現在の日本語表現の中にも、「迷うこと三日」「誤解すること甚だしい」などという言い回しは、漢文訓読に由来するものとして日本語の中に定着している。

訓読は日本語への翻訳作業だ。「述語＋補語」の構造を、訓読のままに日本語の「主語＋述語」のように訳す方が自然ならそれでよいし、逆にそのまま訳しては何だかおかしな日本語表現になるようなら、本来の構造にしたがって、補語が述語を後置修飾するように訳せばよい。要するに、状況によって柔軟に日本語訳すればよいわけだ。

また、方向補語や結果補語は一つの熟語として読むことが多く、我々には補語と意識するのは難しい面がある。文のなりたちを理解することは意味のあることだが、事細かにこだわる必要はない。

◇補語とはみなせない形

一見して補語のように見えるものが、構造的には実は補語とはいえない形式がある。述語が構造助詞などによって名詞化している時にはそれを主語とみなし、補語にあたる語が述語そのものになる。

示レ之ニ者三タビス。（史記・項羽本紀）

▼之に示す者三たびす。

▽彼に見せることが三度であった。

「示レ之ニ者」は、名詞句を作る構造助詞「者」によって「彼に見せること」ということがらを指す名詞句になっている。つまり「示レ之ニ者」は、文の先頭に置かれた名詞句であり、主語である。したがって「三」はそれに対する述語そのものであり、「示ス」の補語にはなり得ない。この名詞句を作る「者」については、構造助詞の章で詳説する。

なお、右の例は、もし「示レ之ニ三タビス」であれば、「示レ之ニ」は述語構造だから、「三」は述語「示ス」の数量補語となって述語「示ス」を後置修飾することになり、「三度彼に示した」という意味になる。訓読のしかたは同じであっても、古典中国語の構造そのものが異なるからだ。

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）

◇述語に後置される前置詞句は補語か？

「於 ○」や「以 ○」など、述語に後置された前置詞句が補語とみなされることがある。これについては、中国の学説も意見の分かれるところだが、述語や述語構造に後置された前置詞句が述語に意味を補うという点で、補語のように働いているともいえよう。

前にも述べたように、前置詞はもともとは動詞であったものが具体的な意味を失い、形式的な意味だけを表すようになったもので、特別な動詞ともいえる。これが目的語を伴うことにより、具体的な意味が補われて述語を修飾する。たとえば次の例文を見てほしい。

漢王戦二〈於彭城二〉。（史記・黥布列伝）

（述語）（前置詞句）（意味を補う）

▼漢王彭城に戦ふ。

▽漢王が彭城で戦う。

「漢 王 戦」でも文は成立する。しかし、述語「戦」の後に「於 彭 城」を置くことで、「漢 王 戦 於二彭 城一」と読めばわかるように、「戦」という述語の動作が「彭城」という場所に依存することを「於」が補うことになる。つまり、「於 彭 城」の本来の意味は、「彭城（という場所）でする」であり、形式的な意味しかもたない動詞「於」が「彭 城」を伴うことで、具体的な意味を帯び、述語の動作を補足説明しているのである。その意味で、この文は、

主語「漢 王」＋述語「戦 於」＋目的語「彭 城」

の構造ともいえる。

しかし現在、中国の語法学では、この「於 彭 城」を前置詞句とみなし、述語の後、すなわち補語の位置に置かれることから、一般の補語と同様に、後置修飾の成分として機能していると考えられているのである。議論のあるところだが、本書もこの考え方に従っておく。

印刷・複写禁止

著者の許諾なく、複写・複製・印刷・配布することを禁じます。（「漢文学びのとびら」https://xuexi.mokuren.ne.jp/kantobi/）